

松 山 大 学 論 集  
第 23 卷 第 5 号 抜 刷  
2 0 1 1 年 12 月 発 行

本当の「友情」とはどういうものなのか？  
—— オスカー・ワイルドの童話「忠実な友人」における  
社会批判の本質 ——

向 井 秀 忠

# 本当の「友情」とはどういうものなのか？

—— オスカー・ワイルドの童話「忠実な友人」における  
社会批判の本質 ——

向 井 秀 忠

## 1. ワイルドによる童話のモチーフの多重性

オスカー・ワイルド (Oscar Wilde) は合計で九つの童話を残しているが、それらの直接的な執筆の動機は自分の子どもたちに読み聞かせるために書いたものとされている。実際、本人がそう述べているだけでなく<sup>1)</sup>彼の書いた童話のほとんどが、黙読ではなく音読した際により効果を発揮するような工夫がされていることをみると<sup>2)</sup>子どもに朗読して聞かせることを念頭にこれらの作品を書いたことは確かであろう。しかしながら、そもそも作家自身のコメントをどこまで文字通りに受け止めていいのか判断は難しいし、それが一筋縄ではないワイルドのものであればなおさらであろう。事実、彼が書いた童話を子ども向けの物語として読むだけではあまりにも単純にすぎ、素直すぎる読者としての読み方に甘んじることになってしまう。

ワイルドの童話の代表作のひとつに「幸福な王子 (“The Happy Prince”)」があるが、この物語は、最後の場面から、新約聖書マルコによる福音書第10章第21節の教え「あなたに欠けているものがひとつある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい」(訳文は新共同訳聖書による) にならった、

1) 平井博、『オスカー・ワイルドの生涯』(東京：松柏社・1979年) pp.83-84.

2) この点については、向井・近藤存志編、『ヴィクトリア朝の文芸と社会改良』(東京：音羽書房鶴見書店・2011年)収録の拙論「オスカー・ワイルドが夢見た世界——童話『幸福な王子』に託した『社会改良』」で少し触れた。pp.86-87を参照のこと。

キリスト教的慈愛精神の称揚がメイン・プロットとなっていることは明白である。しかしながら、テキストを精読すれば、そのほかにも、「芸術と有用性」論争、父権制社会の中の女性の不安定な地位、同性愛的感覚の称揚、そして社会における貧富の差など、複数のレベルの社会批判の物語がサブ・プロットとして同時に並行して語られていることがわかってくる。この作品が、外見よりは読み方によっては複雑な多重構造となっていくことがわかる<sup>3)</sup>。

さらに、それらのサブ・プロットは、あらゆる読者が読み取ることができる単純でわかりやすい提示方法ではなく、読み手の意識や知識が試されるものとなっている。例えば、同性愛の隠しテーマについては、クィア理論などを知っている現代の読者であれば容易に読み取ることが可能であろうが、そういう知識のない当時の一般読者がそのことに気づくのは難かったであろう。こういう点にこそ、ワイルドの童話を読み解く面白さがあるのだ。本論では、先のような素直すぎる読者ではなく、物語の理解に積極的に介入する読者となり、ワイルドの童話を「開かれたテキスト」として読むことによって、「わがままな大男（“The Selfish Giant”）」、「ナイチンゲールとばらの花（“The Nightingale and the Rose”）」、そして「忠実な友人（“The Devoted Friend”）」について考えていきたい<sup>4)</sup>。その場合、これらの童話が子どもの読み聞かせのために書かれた読み物という見方からは離れ、ワイルドが執筆ときに深刻な問題を抱えていると考えた当時の社会を批判する物語として読んでいくことになるであろう。

## 2. 「わがままな大男」と「ナイチンゲールとばらの花」を読む

新潮文庫版の翻訳『幸福な王子』の「あとがき」では、訳者による「解説」の中で、「わがままな大男」は「エゴイズムの愚かさと醜さを、『愛の傷』を両のてのひらにつけた小さな男の子によって悟らされ、その悟りとともに死んで

3) 拙論、「オスカー・ワイルドが夢見た世界」pp. 89-96.

4) テキストには次のものを使用した。Oscar Wilde, *Complete Short Fiction*. Ed. Ian Small (London: Penguin Books, 2003). なお、本文中の引用の翻訳には次のものを使用した。オスカー・ワイルド、『幸福な王子』、西村孝次訳（東京：新潮文庫・1985年）。

いったエゴイスティックな男の物語」<sup>5)</sup>と要約されている。

物語は次のようなものである。友人の人食い鬼を訪ねていた大男が七年ぶりに家に戻ると、庭では子どもたちが自由に遊んでいた。それを見つけた大男は、子どもたちが入れないように庭を高い塀で囲み、「無断侵入者は起訴されるべき」という立札を立てた。ところが、子どもたちがいなくなった庭では、小鳥たちがさえずらなくなり、鳥がいなくなったために花も咲かず、その結果、一年中、雪や霜や北風だけの寒い場所となってしまう。男はその状態を残念には思うものの、理由がわからず、そのまま放置していた。ところが、ある日、心地よい音楽で大男が目を覚ますと、子どもたちが高い塀の隙間から庭に入り込み、そのお陰で庭にも春がやって来ていた。そんな中、ひとりの小さな男の子だけが木に登れずに泣いていた。この光景に心が和らいだ大男はそっと男の子を木の上に乗せてやり、自分の「わがまま」ぶりを初めて認識し、高い塀を壊してしまう。ところが、その男の子はどこかへ行ってしまっ、その後に見られることはなかった。大男は開放した庭で子どもたちと楽しく過ごし、やがて年をとってしまう。何年もたったある日、白い花がいっぱい咲き、庭にある金色の枝をして銀色の実をつけた木の下に、例の男の子が立っているのを見つけた。その小さな両手両足には釘あとがついているのに気づいた大男は男の子が傷つけられたことに怒るが、男の子が「これは愛の傷」と告げたとき、大男は不思議な畏怖の念に襲われてひざまずいた。そして、男の子が庭で遊ばせてくれたお礼として、今度は自分の庭、つまり「天国の庭」へと大男を連れて行きたいと言う。翌日、庭に遊びに来た子どもたちは、白い花で全身を覆われて死んでいる大男を発見した。

この物語について、「高い塀をはりめぐらした庭を持った驚くべき利己主義者が他者への思いやりに目覚め、変容へと至らしめる物語」<sup>6)</sup>と理解するのは

---

5) 西村, p. 230.

6) 阿久根政子, 「Oscar Wilde の Fairy Tale 考」, 『久留米信愛女学院短期大学研究紀要』第 28 号 (久留米信愛女学院短期大学・2005 年) p. 21.

自然な読み方であろう。また、大男の庭がエデンの園であり、両手両足に釘あとの傷を負った男の子がキリストを象徴していると考えるなど、作品の中でキリスト教を連想させるさまざまなモチーフが印象的に用いられていることがわかってくると、この作品もまたキリスト教的価値観を称揚する物語として読むべきことがわかり、作者のワイルドの意図もそこに読み取ることはできるだろう<sup>7)</sup>。

大男の「庭」が聖書のエデンの園をイメージしたものであることは次のように説明されている。

緑の草が生え、美しい花々が咲き、果実を実らせる樹木に囲まれた平穏な庭園は、中世西洋の「楽園」観であり、その原型はエデンの園にある。中世以降、美術の世界では楽園を描写する際、幾つかの決まった様式が用いられてきた。例えば典型的なものとして、庭園の周囲に塀をめぐらし、「囲まれた庭」とすること。これは、庭園の内部と外部とを聖と俗の別の世界として隔てる役割を持つ。内側が緑豊かな楽園であり、神の愛の示される所であるのに対し、外側は荒地や岩山で対照させる。……そして、内側は緑に溢れ、何種類もの花が咲き競い、果実を実らせる樹木が並ぶ。エデンの園を象徴する命の木と知恵の木の二本の木や、噴水・水盤が描かれ、小鳥たちが飛び交う様子は春の情景を表している<sup>8)</sup>。

高い塀が「聖」と「俗」とを分かつものであり、「僕らはあそこでなんて幸せだったのであろう<sup>9)</sup>」という子どもたちの会話について「エデンの園を追放

7) 例えば、次の論文では、「白」という色のイメージに着目することで、この作品のキリスト教的側面を読み解く試みが行われている。三嶋君夫、「オスカー・ワイルドの“The Selfish Giant”に用いられた WHITE COLOUR についての考察」、『研究集録』第17号（大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院・1997年）pp. 152-165。

8) 林孝憲、「The Selfish Giant にみるシンボリック・イメージ」、『千葉敬愛短期大学紀要』第24号（敬愛大学・千葉敬愛短期大学・2002年）p. 60。

9) Wilde, p. 20.

されたアダムとイヴの取り返しのつかない後悔の嘆き」と理解すれば、「giantとは楽園追放以前の間人を象徴している」<sup>10)</sup> という指摘も理解できる<sup>11)</sup> しながら、この物語をただ無心に読んでみると、自分の「庭」を高い塀で囲んだ大男の行為について、次のような単純な疑問が湧いてこないだろうか。果たして、この大男は本当に「わがまま」なのだろうか、と。

長い間、留守にしていた自宅に戻ってみると、子どもたちとは言え、見も知らずの間人が我が物顔で自分の庭の中で遊んでいたならば、たいていの人は大男のように怒るのではないだろうか。大男が高い塀を作ったことについては、先に引用した論文の中でも「Giantが不在の間、子供達が彼の庭で遊んでいた事を知り、彼は自分の私生活に侵入されたことに苛立つ。そこで彼は自分の生活を守るために高い塀を築く」<sup>12)</sup> と説明されている。まさに大男が立札に書いたように、子どもたちは確かに「無断侵入者」であり、大男のプライバシーを侵し、許可なく私生活に踏み込んでくる見知らぬ存在なのである。そうであれば、危険を避けるためにも、断固たる態度で無断侵入は拒否するという大男の行動はむしろ自然なものではないだろうか。無人島に流れ着いたロビンソン・クルーソーは塀で囲むことから岩づくりを始めたし、現在の私たちの住む家だって塀で多くが囲んでいることを考えれば、大男のこの行為を「わがまま」なものとして非難することは果たして正当なのだろうかと疑問に思えてくる。

「幸福な王子」の王子は生前には無憂宮<sup>サン・スーシー</sup>という宮殿に住んでいたが、そこは高い塀に囲まれていた。ただ、同じように「高い塀」に囲まれているにしても、「わがままな大男」の場合、「幸福な王子」におけるものとは本質的に異なっている。王子自身、このことについて次のように説明している。

10) 林, p. 61.

11) ただし、林は、この後、作品の冒頭での「人食い鬼」のことに言及し、「文字通り大男をエゴイズムの愚かさや醜さを体現したエゴイスティックな人間の象徴と見るよりも、エゴイズムというような言葉が存在する以前の原初的 (original) で無垢 (innocent) な人間像としてとらえるべき」とさらに深めた指摘を続けている (p. 62)。

12) 阿久根, p. 22. 傍点は筆者。

「わたしが生きていて人間の心をもっていたころは、涙とはどんなものか、知らなかった、無憂宮に住んでいたからで、そこへは悲しみがはいることを許されていないのだ。昼間は仲間と庭で遊び、夜になるとわたしは大広間で舞踏の先頭に立った。庭のまわりにはとても高い塀がめぐらしてあったが、その塀のむこうには何があるのか、聞いてみたいとも思わなかった、まわりのものがみんなそれほどきれいだったから。廷臣たちはわたしを幸福な王子と呼んだし、わたしもじっさい幸福だったのだ、もし快樂が幸福であるとしたらね。そういうふうにはわたしは生き、そんなふうにはわたしは死んだ。」<sup>13)</sup>

このような「町の醜さとみじめさ」<sup>14)</sup>について無関心であった生前の王子については、それが必ずしも本人だけの責任ではないにしても、生活に苦しんでいる町の人びとから彼の生活が「わがまま」なものであると非難されるのは仕方がないであろう。生前の王子の生活ぶりについては、貧しい生活に苦しむ町のお針子の苦境にまったく思いが至らず、宮殿のバルコニーで「そして愛の力はなんとすばらしいことでしょう！」と口にする若者と、「お針子なんて、とても怠けものですものね」<sup>15)</sup>と非難するその恋人の女官のやり取りに象徴的に描かれている。これと比してみれば、無断侵入者を拒むために「高い塀」で「庭」を囲んだ大男の行為は、子どもたちの楽しみを奪ったことのほかには非難すべき点はないように思われまいだろうか。この点については下記のような指摘もされている。

題名が示す通り、物語の中でも大男は五度、‘selfish’と形容されているが、子供達を高い塀で自分の家から締め出す以外は、特に際立って selfish

13) Wilde, p. 5.

14) Wilde, p. 5.

15) Wilde, p. 6.

なキャラクターを発揮しているとは感じられない。……実際に *The Selfish Giant* を読んだ子供達が大男に対してどれだけ selfish と感じ、嫌悪の感情を抱くであろうか。ワイルドの童話の題名に着目すると、ワイルド一流の皮肉の表れか、逆説的な形容詞が使われる傾向がうかがわれる。粉屋の Hugh は、友人の Hans にとって全く devoted な友人ではないし、*The Remarkable Rocket* のロケットは全く remarkable でもない。また、*The Happy Prince* の王子が果たして本当に幸福であるか否かは、意見の分かれるところである<sup>16)</sup>

ここでの指摘には同意できるが、「以上のことから、物語の前半における大男のキャラクターは、文字通り selfish と受け取るよりも、やはり、知性や道徳に感化される以前の、粗野ではあるが悪意のない無垢な人類の原型のごとき存在と解釈することが自然」という結論とは違う見方をここでは試みたい。つまり、この指摘からは大男の性格造形の源を探るよりも、むしろワイルドが童話を書く際に好んで使った逆説的なレトリックの使い方に注目するべきではないだろうか。なぜならば、ここで指摘された「逆説的な形容詞が使われる傾向」は、単に題名にだけに限られるものではなく、物語全体についても当てはまるものように思われるからである。

その好例のひとつとして、まずは「ナイチンゲールとばらの花」について考えてみたい。この物語は、「赤いばらを持ってきてくださったら踊ってあげましょうと、あのひとは、言ったんだ」<sup>17)</sup> という、恋する女性に赤いばらの花をねだられた若い学生の言葉で始まり、その学生に恋をしたナイチンゲールが、自分の命を賭けて赤いばらの花を手に入れるというものである。ただ、結末では、ナイチンゲールのそんな悲壮な覚悟を知らない若者も、そして念願の赤いばらを手に入れたはずのお相手の少女も、文字通りに命と引き換えにナイチン

16) 林, p. 62.

17) Wilde, p. 12.



ゲールが手に入れた赤いばらの花を軽々しく扱ってしまう。この物語の意味は、ナイチンゲールの恋に対する深刻な想いと、若者と彼が恋する女性が体現する現実の恋との間にあるずれが生む皮肉にあることがわかる。

まず、学生は、赤いばらの花が手に入りさえすれば彼女が自分の方を振り向いてくれると考えている。そして、ナイチンゲールはそんな若者を見て自分にも「やっとうんとうの恋人が見つかった」<sup>18)</sup>と信じ、次のように考える。

「これこそほんとうの恋人だわ。あたしの歌うことで、あのひとは悩んでいる。あたしにとっての喜びが、このひとは苦しみなのだ。いかにも恋とはふしぎなものだ。エメラルドよりも貴く、みごとなオパールよりも高い。真珠や柘榴石でも買えなければ、市場に陳列されてもいない。商人から買うこともできなければ、黄金と引きかえに天秤で秤りわけることができない」<sup>19)</sup>

ところが、ナイチンゲールが自らの生き血で染め上げた赤いばらの花が手に入ってみると、少女は若い学生とナイチンゲールとが思いもしなかった次のような反応をする。

しかし少女はまゆをしかめました。

「このばらはわたくしのドレスに似合わないと思いますわ」と少女は答えました。「それに、侍従の甥御さまがほんものの宝石をいくつか送ってくださいましたし、宝石の方が花よりもずっと高価なことは誰でも知っていますものね」

「いや、それは心外な、あなたは恩知らずだ」と学生は怒って言いました。そしてそのばらを通りへ投げ捨てると、ばらは溝に落ちて、荷車の車

---

18) Wilde, p. 12.

19) Wilde, pp. 12-13.

輪にひかれてしまいました。

「恩知らずですって！」と少女は言いました。「本当を言うと、あなただっけずいぶん失礼なかね。それに、つまり、要するに、あなたはなんなの？ ただの学生よ。だっけ、侍従の甥御さまみたいに、靴に銀のびじょう金をつけてさえいないじゃありませんか」そう言うや椅子から立ちあがって、家のなかへは行って行ってしまいました<sup>20)</sup>

ここで読者は次のや物語の皮肉に気づかざるを得ない。物語の冒頭で若い学生は「一輪の赤いばらがなないばかりに、ぼくの一生はみじめなものになちまう<sup>21)</sup>」と考えているが、せっかく手に入れた赤いばらはまったく役に立たず、彼が裕福ではないことであさりと少女に捨てられてしまふ。一方、ナイチンゲールは、恋とは宝石をはじめとするどんな高価なものよりも価値があるという信念から命を投げ出すが、侍従の甥御が少女に与えた宝石の前ではそうして命と引き換えに作った赤いばらの花は何の価値もないのである。そして、どんな賢者も哲学も教えてくれなかつたという恋の意味について、若い学生は「恋なんて、なんとばかばかしいものなんだ」と次のやに悟ることになる。

「論理学の半分も役に立ちゃしない、何も証明しないからな、そしていつも起りそうもないことを言っけ、真実でないことを人に信じさせている。じっさい、恋なんてまったく非实际的だ、そして、現代で实际的であることがすべてなんだから、ぼくは哲学へもどって形而上学を研究しよう<sup>22)</sup>」

こうして、物語は、ナイチンゲールの純粹さとともに、「恋は命にもまさる

---

20) Wilde, p. 17.

21) Wilde, p. 12.

22) Wilde, pp. 17-18.

もの]<sup>23)</sup>と考えたナイチンゲールの世間知らずの無知が招いた悲劇ともなり、純粹無垢な信念とは反対の結果になってしまうことを皮肉的に描くことになる。もちろん、ナイチンゲールの純粹さに思いを馳せ、若い学生や相手の少女の身勝手さに腹を立てるにしても、ナイチンゲールがけなげに純粹に描かれれば描かれるほど、結末における皮肉が効果的に響いてくることになる。ワイルドの用いた「逆説的な」レトリックが最大限の効果を発揮する場面であろう。

### 3. 「忠実な友人」を読む

本論で扱うもうひとつの作品である「忠実な友人」も、同様に皮肉的な要素の強い作品となっている。正直な農夫である小さなハンスには友人が多かったが、中でも一番「忠実」な友人は粉屋の大男のヒューであった。彼の口癖は、「ほんとうの友達ってものはすべてを共有すべきだよ」<sup>24)</sup>であった。二人の関係は次のように描かれている。

じっさい、その金持ちの粉屋は、小さいハンスにとっても忠実だったので、ハンスの庭を通りすぎるときは、かならず塀越しに身をかがめて、花を摘んで大きな花束をつくるか、おいしい野菜をひとつかみ取るか、それとも果物の季節だと、すももやさくらんぼでポケットをいっぱいにするか、しないことはなかった<sup>25)</sup>

近所の人たちは、ヒューは金持ちであるにもかかわらず、ハンスに何ひとつお礼をしないことを不審に思ったが、当のハンスはそんなことを気にしないで喜んで付き合っていた。

ここで注目したいのは、目につきやすい粉屋のヒューの自分勝手さそのもの

---

23) Wilde, p. 15.

24) Wilde, p. 25.

25) Wilde, p. 25.

ではなく、彼が自分の行為を正当化するために用いている説明の方法である。まず、冬の間に厳しい生活を強いられているハンスのところへは出かけないことについては、彼は「人が困っているときは、放っておくべきで、お客になったりして迷惑をかけちゃ悪いから」<sup>26)</sup>と女房に話す。そして、春になれば桜草をたっぷりもらえるから出かけるのだ、と付け加えることも忘れない。粉屋の子どもはハンスに同情して、「それではうちに招待してあげればいいのでは」と言うと、それには次のように反論する。

「なんて間抜けだ、お前は！」と粉屋は叫んだ。「せっかくお前を学校にやっても、なんの役に立つのかわからん。なんにも覚えんようだな。よいか、もしハンスのやつがここへ来て、この暖かい火と、このご馳走と、この赤ぶどう酒の大樽を見たらだ、うらやましがるかもしれん、ところが、うらやみってのは、とても恐ろしいもので、誰の根性もだめにしてしまおう。ハンスの根性がだめになるのを、わしはなんとしても黙って見ておられん。わしはあいつのいちばん仲よしだ、だからいつもあいつの監督をして、誘惑にかからないように気をつけてやるつもりさ。それに、もしハンスがここへ来たら、すこし粉をわけてくれというかもしれんが、そんなこと、できるもんか。粉は粉、友情は友情さ、だからごっちゃにしちゃいかん。だってさ、このふたつの言葉は、綴りも違うし、意味もまるで違う。そんなこたあ、誰だってわかるはずさ」<sup>27)</sup>

この他にも、粉屋に命じられた仕事をこなすことで精一杯で疲労困憊して寝込んでいたハンスに向かって、彼は厳しい態度で次のように言う。

「いやはや、きみもずいぶん怠けものだな。……怠惰は大きな罪だよ、

---

26) Wilde, p. 26.

27) Wilde, pp. 26-27.

だからわしの友達は何でも、怠けものや物ぐさになってほしくないんだ。わしが歯に衣着せずにものを言うのを気にしちゃだめだぜ。もちろんきみの友人でなきゃ、そんなものの言いかたをしようなどとは夢にも思わぬ。しかしだ、せっかくの友情がなんの役に立つかね、もし思ったとおりのことが言えないとしたら？ すてきなことを言って、なんとか人の機嫌をとったりおべっかを使ったりすることなら、誰にだってできるさ、ところが、真の友人はつねに不愉快なことを口にし、苦しみを与えても気にしないものなんだ。じっさい、ほんとうに真の友人ならそのほうを選ぶさ、そのときこそ、善いことをしてるんだ、と知っているからな」<sup>28)</sup>

ヒューの女房はそんな夫の話聞いて、「おまえさんって、ほんとにひとさまに思いやりがおありなのね」<sup>29)</sup> と言い、教会の牧師に譬えながら夫が話上手であることを盛んに称賛する。そして、粉屋本人も「上手に振舞う人は多いがな」、「話の上手な人となると至って少ない、つまりだな、そのふたつのなかで話すほうがずっとむずかしいってことさ、それにまたずっと立派なことでもある」<sup>30)</sup> と胸を張る。

ここで粉屋の話上手なことが強調されていることがこの物語の核のひとつであり、粉屋の黒いものを白と見せるような、レトリックの使い方の巧みさにあることがわかってくる。つまり、自分の行為そのものが正しいのか否かという本質的な事柄ではなく、正当に見えるように巧みに理由づけをし、周りの人にそう思い込ませる狡猾さがうまく描かれていることがよくわかってくる。だからこそ、ハンスはどんなにひどい仕打ちを受けようとも、粉屋の友情を疑うことはない。

その理由については、「そんなことにすこしも心をわずらわさず、ほんとう

---

28) Wilde, p. 30.

29) Wilde, p. 26.

30) Wilde, p. 27.

の友情というものは無私なものだ、ということについて、いつも粉屋が口にするすばらしい話に耳を傾けるほど、大きな楽しみはなかった<sup>31)</sup>と説明されている。ここでハンスの行き過ぎた人の好きを愚かなだと批判することは簡単であるが、やはり注目すべきは、粉屋の使う自己正当化のレトリックの使い方と、それを文字通りに解釈するハンスの関係であろう。と言うのは、粉屋の使う自己正当化のレトリックは彼個人に独特なものではなく、ヴィクトリア朝期のイギリスに広く浸透したものでもあるからだ。

粉屋の話聞いていて思い出すものとして、例えば、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) の『オリヴァー・トウィスト (*Oliver Twist*)』の登場人物のひとりである教区吏のバンブル氏がいる。第23章において、彼が救貧院の婦長とこんな話をする場面がある。ある貧民に四ポンドのパンと一ポンドのチーズを与えたら、さらに石炭をくれと言ってきて、まったく感謝している様子がない。このほかにも厚かましい貧民の例には枚挙にいとまがないとこぼし、「救貧院外の救済活動の一大鉄則はというと、貧乏人には欲しがらないものばかりを与えるべし<sup>32)</sup>と彼は断言する。本来、貧民の救済のことを念頭に置いた場合に、この「欲しがらないものばかりを与えるべし」という言葉は何とも奇妙であるが、事実、バンブル氏はこのことを実行している。第7章で、死んだ母親の悪口を言われたオリヴァーが騒動を起こした際、バンブル氏は問題のありかについて次のように説明するのだ。

「食物ですよ、奥さん、食物のせいじゃ」バンブル氏は力強く厳しい口調で言った。「奥さんはあの子に食物をやりすぎたんじゃ。あんな身分のやつにはぶ相応なぶ自然な魂と精神を育ててしまったんですわい。奥さん、実学の精神に富む委員会として申し上げますが、救貧院のご厄介に

31) Wilde, pp. 25-26.

32) Charles Dickens, *Oliver Twist*. Ed. Philip Horne (London: Penguin Books, 2003) p. 187. 引用には、チャールズ・ディケンズ、『オリヴァー・トウィスト』小池滋訳（東京：ちくま文庫・1998年）を使用した。

なっているような連中に、魂や精神が何の役に立ちます？ 連中にゃ生きた身体を持たせてやるだけでもう充分じゃありませんか。奥さん、あの子におかゆだけを食べさせておいたら、こんなことにはならなかったでしょうにねえ」<sup>33)</sup>

これが、当時のイギリスで深刻な社会問題となり、貧民救済対策として施行された新救貧法に基づいて行われていた「正義」の実態なのである。結局のところ、新救貧法は、「すべての貧乏人どもは救貧院に入ることによって、徐々に飢死させられるか、救貧院に入らないですぐに餓死させられるか、どちらかを自由に選択すべきである」<sup>34)</sup>とディケンズが批判しているような救済の効果を発揮するところではない悪法であったのだが、ここで注目したいのは、悪法であったという事実ではない。自分たちの行為を正当化するバンプル氏のレトリックであり、それを当然のものとして受け入れている社会の鈍った感性なのである。これは、先のワイルドの「忠実な友人」の粉屋のものと似通ってはいないだろうか。このように、両作品には共通して通底している俗的で自分勝手に幼稚な自己正当化のレトリックがあることがわかる。

ヴィクトリア朝期のイギリスにおいて貧富の差が大きく広がったことは、「二つの国民」というベンジャミン・ディズレーリ (Benjamin Disraeli) の言葉によって知られている。

「二つの国民」といえば、すぐに思い出すのは、ヴィクトリア朝期の保守党政治家ディズレーリが書いたベストセラー小説『シビル』の中の次の指摘であろう。「二つの国民。その間には、何の往来も共感もない。彼らは、あたかも寒帯と熱帯に住むかのように、また全く別の遊星人であるかのように、お互いの習慣、思想、感情を理解しない。それぞれ違ったし

---

33) Dickens, p. 53.

34) Dickens, p. 13.

つけで育てられ、全く違った食物を食べている。お互いに別のしきたりがあって、同じ法律で統治されてはいないのだ。この「富める者と貧しき者」<sup>35)</sup>。

もちろん、上層・中産階級の人びとの下層階級に対する無理解や無関心そのものも深刻な問題であったが、これにさらに追い打ちをかけているのが、そういう状態を正当化し、問題のありかをさらにわかりにくくするこのような自己正当化のレトリックにあることがわかってくる。つまり、深刻なはずの社会問題は彼らの狡猾なレトリックによって無化され、そして彼らの「ことば」によって隠ぺいされることになっていたのである。「ことば」の使用については特に意識的だったはずのワイルドがそのことに気づかない訳はない。最後に、この点についてさらに論じていくこととする。

#### 4. ワイルドの童話における社会問題

「忠実な友人」において、ハンスの人の好きに徹底的に付け込んですべてを奪い取り、そして最後には死なせてしまう粉屋の大男のヒューの行為は、先に述べたように、ヒューが使う「友情」などの「ことば」遣いによって正当化されていく。そして、皮肉なのは、そのために苦しめられているハンス自身でさえ、それを疑問を感じるどころか反対に感謝さえしている。また、『オリヴァー・トウィスト』においては、救貧法が貧民の救済のために作られた制度であるにもかかわらず、その制度が体制によって恣意的に運用されることによって、法律の本来の趣旨に反して貧民を苦しめる根拠となっている現実がある。しかし、ここでもまた、バンプル氏のような物言いによって、教区委員会や教区吏らの行為は正当化されることになる。つまり、この二つの物語は、並べてみることで、明白であるはずの社会悪が「話すこと」によって隠ぺいされてい

---

35) 長島伸一、『世紀末までの大英帝国—近代イギリス社会生活史素描』（東京：法政大学出版局・1988年）p. 4.



る事実を寓話的に描くことで批判しようとする作者の意図がわかるようになっている。「ことば」は貧民を救うための武器になることもあれば、使い方によっては、反対に貧民を苦しめる悪しき現状を肯定する口実にもなってしまうという、両刃の剣の一面を持っていることを理解すべきなのだ。そして、その批判の矛先は単に社会体制に向けられるだけでなく、このような「ことば」がもともと備えている危うさについて無頓着にすぎた人びとに対しても向けられると読み取ることができる。社会悪の根源に対する直接的な批判もさることながら、「ことば」の持つこういった危うさこそ、ワイルドやディケンズが自らの物語を通して訴えたかったことではなかったのだろうか。

こうして、「忠実な友人」の粉屋のヒューと『オリヴァー・トウィスト』のバンプル氏に共通するレトリックの用い方から、ワイルドの童話においても社会に対する批判と改良の訴えが物語の主流のひとつとなっていることがわかってくる。「幸福な王子」は貧民救済そのものがテーマのひとつになっていることは明白であるが、一見、当時のイギリスにおける貧困の問題とは関連のないように思われる「わがままな大男」「ナイチンゲールとばらの花」そして「忠実な友人」もまた、それと通底するテーマを有した物語として読み替えることができるのだ。

「わがままな巨人」については、すでに「ヴィクトリア時代の巨大な大英帝国の営利主義を『巨人』にたとえ、その『わがままな』醜さを反省させる役割を果す『子供』の中にキリストの姿を見る」ことができ、それを「真のキリストを忘れたクリスチャンへの警告」<sup>36)</sup>と考える読み方が指摘されている。この見方によれば、大男が象徴しているのが「営利主義」であり、その主義を信奉して実践していた資本家階級であることがわかってくる。また、その見方をすれば、彼の庭を囲むように作られた「高い塀」によって「庭」の中に入ることを拒否された子どもたちは、当時、苦しめられていた貧困層の労働者階級の人

---

36) 山田勝、『世紀末とダンディズム—オスカー・ワイルド研究』（大阪：創元社・1981年）p. 261.

びととなるであろう。つまり、この物語は、巨大な富を得た資本家階級と、彼らに搾取され続けて惨めな生活を強いられ続けていた労働者階級の人びとの関係を比喩的に描いた物語と読み解くことができる。そうであれば、「庭」を囲む「高い塀」は上層階級の貧困層に対する無関心の象徴と理解できるであろう。

それでは、「ナイチンゲールとばらの花」はどう読み解くことができるだろうか。「死によって完成される恋を、墓のなかでも死ぬことのない恋」<sup>37)</sup>を信じてナイチンゲールは命を捧げて赤いばらの花を作り上げるが、若い学生はそんなナイチンゲールのことを感情もない芸術家のようなものとして、「スタイルばかりで、すこしも真摯さというものが無い」うえ、「他人のために自分を犠牲にしようとはしない」<sup>38)</sup>と考える。そして、ナイチンゲールの死と引き換えに手に入った赤いばらの花は、宝石よりもドレスには似合わないという理由で少女によって拒否され、学生が道に投げ捨てたために荷車に轢かれてしまう。それだけではなく、ナイチンゲールが恋ゆえに命を投げ出して得た赤いばらの花の代償は、「恋なんて、なんとばかばかしいものなんだ」<sup>39)</sup>という学生の言葉だけであった。この物語についても、ナイチンゲールが、働くことだけを一方的に求められ、ぎりぎりの生活を強いられている労働者階級の人びとのことを象徴していると読むならば、そこから利益を得ようとした若い学生と金銭的価値だけを重んじる少女は経済的な利益優先の資本家階級を象徴したものであるとわかってくる。そして、ナイチンゲールの真意がこの二人には決して伝わらないことは後者の無関心につながることになり、この物語においてもまた、見えない「高い塀」が両者の間に立ちほだかっていることがわかってくる。

最後の「忠実な友人」においては、富める資本家階級と搾取される労働者階級の姿が、粉屋のヒューとハンスを通してもっとわかりやすく描かれている。そもそも、ヒューが大きく、ハンスが小さいと描写されることが両者の関係を

37) Wilde, p. 16.

38) Wilde, p. 15.

39) Wilde, p. 17.

象徴的に表わしている。二人の関係は次のように描かれる。「ところが、どうしたわけか、[ハンスは] すこしも花の世話ができなかった、というのはたえず友人の粉屋がやってきて、遠くまで使いに出したり、製粉場で手伝いをさせたりしたからである。」さすがに、「小さなハンスもときには、花々が忘れられてしまったと思いはしないかと、心配だったので、困りはてることもあった」が、ハンスが問題なのは、「しかし粉屋はいちばんの親友だと考え直して、心を慰め」てしまうことにあったと言えるだろう。つまり、ハンスには、自分の置かれている理不尽な現状に対する正確な判断や理解をくだす力がすっかり失われてしまっているのだ。そのことは、次の一節から読み取ることができるだろう。「こうして小さなハンスは、粉屋のためにせっせと働き、粉屋は友情についてありとあらゆる美しい言葉を口にした、するとハンスはそれを手帳に書きとめて、なにしろたいへんな勉強家なので、毎晩くり返して読むのだった。」<sup>40)</sup>

ハンスは、粉屋の使う「友情についてありとあらゆる美しい言葉」についてのレトリックにすっかり騙されている訳であるが、そんな彼の愚かさについては手放しに批判することはできないであろう。先にも指摘したように、ヴィクトリア朝期においては、粉屋やバンプル氏のような貧困者への待遇についての物言いは正当なものとして世間一般に浸透していたのである。ただし、それはその時代に限ったものでもないことも次の印象的なエピソードからもわかる。

ある大学の授業で「忠実な友人」がテキストとして扱われた際の報告であるが、担当した教員は提出されたレポートの大半に大きな違和感を覚えたという。というのは、それらのレポートでは、粉屋の言葉を文字通りに理解し、彼のことをハンスにとって本当に「忠実な友人」であると理解したものであったからだ。つまり、粉屋はすっかり善意をもってハンスのために接しており、彼が行ったことは自分勝手な「搾取」であるどころか、すべてハンスのことを思

---

40) ここでの一連の引用は、Wilde, p. 32.

いやっての行為であり、その期待に応えられないハンスはいけない、という趣旨でレポートが書かれていたからであった<sup>41)</sup> この点について、その報告者は次のようにコメントしている。

THOUGHTFUL, BEAUTIFUL, SILLY, 困っている友人を助けるのは相手を甘やかし駄目にする、こういう言葉を字面どおり受け取っているのである。言葉というのはある意味で厄介で、字面に隠された皮肉はまったく通じていなかったのである。これはあるいは最近の傾向の字を読むよりも映像に引かれる一つの危険を表しているように思われる。言葉は字面とはまったく反対の意味になることを知らないはずはないと思うが、映像の額面どおりの受け止め方に慣れていてこのようになるのだろうか。

そして、続けて、「Cultural Literacy（文化読解力）」が「情報処理の過程について、画面やニュースは意図的に作り出されたもので、そこに批判的な視点を持つことを要求している」ことが指摘され、「画面の見えないところを読み取る訓練」の必要性が説かれている。

ここでは、その学生たちの英語力のなさや感受性の鈍さについて批判するよりも、彼女たちがそのように物語を読み誤ってしまった事実とその理由について考える方が興味深い。彼女たちは、ワイルドが逆説的に使ったレトリックをその意図の通りに読み取ることができなかった訳であるが、それは何も彼女たちだけでない。ワイルドがこの作品において批判しているように、ヴィクトリア朝期の多くの人びとも、学生たちと同様に粉屋やバンブル氏たちのような体制側の人間が駆使するレトリックの欺瞞さを見抜くことができなかったからである。

ここで思い出すべきは、テリー・イーグルトン（Terry Eagleton）がヴォルフ

---

41) 風呂本武敏、『見えないものを見るカークルトの妖精の贈り物』（横浜：春風社・2007年）。このあたりの引用は本書のp. 14-15から。

ガング・イーザー (Wolfgang Iser) の受容理論について説明する中で、文学作品を通して私たちが何を学ぶのかについて次のように述べていることであろう。

イーザーの言うもっとも効果的な文学作品は、読者の準拠する習慣的コードや期待に対する新たな批判意識を、読者の中に呼び醒ますような、そうした作品なのである。文学作品を読む際に私たちが持ち込む盲信を、文学作品は疑問に付しそれを変形し、型にはまった認識習慣を「不確かなものにし」、そうした上で盲信や認識習慣のありのままの姿をまるではじめて見るかのように私たちに認識させるのである。すぐれた文学作品は、私たちの所与の認識を強化して終ることはなく、むしろ、規範的なものの見方を打ち破り侵害して、新しい了解コードを私たちに教えてくれる。……イーザーのような批評家にとって、読書の意味とは、読書が私たちにより深い自己認識をもたらし、読書を契機に、自分自身のアイデンティティーに対するより批判的見方が触発される点にある<sup>42)</sup>

そして、イーグルトンは次のように文学研究が果たす役割について説明している。

私がこれまでおこなってきた文学理論の解説の中でつとめて示そうとしたことは、文学理論の中にはもはや文学観というだけではすまされぬ多くのものが賭けられているということだった—文学理論を特徴づけこれを支えるのは、多かれ少なかれ、社会的現実をどうとらえるべきかという読解なのである。そして、この読解こそ、言葉の真正の意味から、まさに罪があるのだ。……文学制度を打破することは、ベケットに関するこれまでとは異なる評論を書けばそれですむというものではない。文学制度を打破す

---

42) テリー・イーグルトン、『新版 文学とは何か—現代批評理論への招待』、大橋洋一訳 (東京: 岩波書店・1997年) p. 123.

ることは、文学と、文学批評、そして文学批評を支える社会的価値。それらが定義される方法に、根底からゆさぶりをかけてやることなのだ<sup>43)</sup>

文学作品を読むことは、今でも一般的に根強く残っているような単に作品を鑑賞する行為ではない。そうではなく、社会そのものについての理解や自分自身に対する認識を新たにさせ、それを通して、もっと深く踏み込んでいく作業なのである。そして、そのために必要な技術こそ、「ことば」を正確に読み取ることなのである。それを身につけることは、現代の社会においても重要である。なぜなら、現代の社会においても、粉屋のヒューやバンプルのようなレトリックが横行しているからであり、私たち自身がハンスのような、無垢でなおかつ無知である社会の犠牲者にはならないように努めること、ワイルドはそのことを童話を通して訴えているように思われる。

---

43) イーグルトン, p. 139.